

# 大型将棋の将棋盤と平安京の条坊：初期平安京の復原

## The Board for the Large Shogi Variants and the Grid Pattern of Heian-kyo: The Restoration of the Early Heian-kyo

高見 友幸\*

Tomoyuki TAKAMI

キーワード：平安京，平城京，摩訶大将棋，大型将棋，呪術としての将棋

### Abstract

A recent treatise on the restoration of the early Heian-kyo has raised the hypothesis that the shape of Heian-kyo is square and the interior of the Kyo shows a square hierarchy. This is considered to be in line with the description of Rites of Zhou “Kao Gong Ji” as the design concept of ancient walled cities, but it also includes the idea of Ten-en-chi-hou. The purpose of this paper is to verify the restoration results of the early Heian-kyo described above together with the spatial structure of other ancient walled cities. The main results obtained are 1) in the design of ancient walled cities, numerical values are clearly inherited, 2) the content of Rites of Zhou “Kao Gong Ji” is properly incorporated into Fujiwara-kyo, Heijo-kyo, and Heian-kyo. From this result, the early Heian-kyo's square hypothesis seems to be correct.

### 1. はじめに

古代日本には現代将棋よりも駒数はずっと多い大型将棋の存在したことが知られている。最近の研究では、この大型将棋が遊戯としての側面だけでなく呪術としての側面を合わせもつことがわかってきた（高見2019a；高見ほか2020a）。大型将棋では、駒の動きと名称が陰陽五行思想に則り決められているが、呪術的な要素は駒だけでなく、将棋盤の方にも現れている。盤のマス数が平安京の条坊の数と完全に一致しているのである。では、平安京の条坊の何が呪術的か、その解明への試みが文献（高見2020b）（以下、平安京復原論文）でなされている。

図1に、摩訶大将棋（まかおしょうぎ）を例にとり<sup>1)</sup>、平安京の条坊がどのように将棋盤として使われるかを示した。条坊の1保<sup>2)</sup>が将棋盤の1マスに対応している。平安京の条坊として、2種類の仮説（仮説A：東西16保・南北16保、仮説B：東西16保・南北18保）と、復原結果の定説（定説C：東西16保・南北19保）が示されている。図1左図（仮説A）と図1中図（仮説B）の条坊を盤として使う場合、駒は交点置きになる。図1右図（定説C）の条坊を使う場合には、駒はマス置きで横に19枚が並ぶ。この初期配置が現在に伝わる摩訶大将棋である。

大型将棋の呪術性は、当初、駒についてのみ解明されていた。駒に呪術性が仕込まれているとすれば、盤にもまた何らかの呪術性が潜んでいるかも知れない、その現れが将棋盤と平安京の条

---

\* 大阪電気通信大学 総合情報学部 デジタルゲーム学科

坊の一致なのではないか、という考えが一連の研究の出発点となっている。盤と条坊が一致する理由の究明は、前述の平安京復原論文ではじめてなされた。この論文では、盤と平安京の条坊との関連性を天円地方の思想に求めている。天の中心にいる天帝と、地の中心にいる天子とが、正方形の条坊を盤に見立てた盤上遊戯を介して通信するのである。この考え方は妹尾達彦氏の素案からの発展であり、素案の詳細は文献（妹尾2001）を参照されたい。こうした帰結は、大型将棋がまさに呪術であることの可能性を示すものとなった。

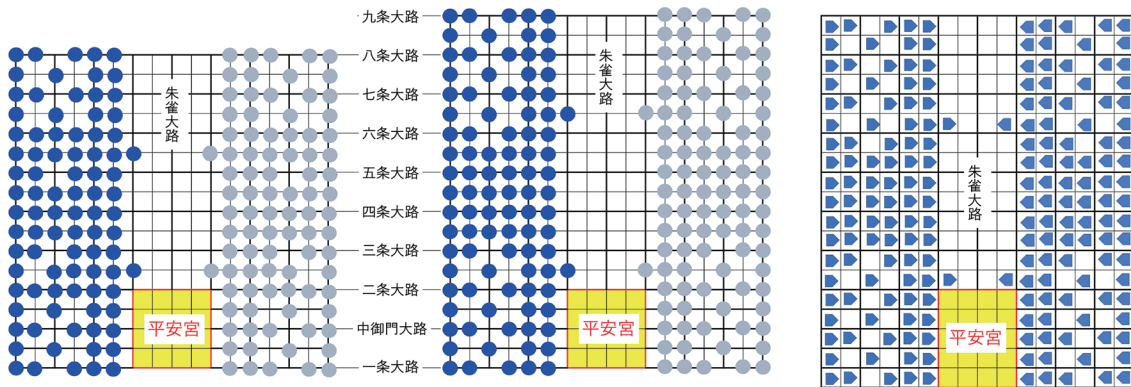


図1. 摩訶大将棋の駒の初期位置と平安京の条坊。図の上方が南である。条坊の1保を盤の1マスとする。左) 平安京は旧一条大路（土御門大路）から八条大路（東西17目・南北17目）、駒は48種180枚・交点置き、中) 平安京は旧一条大路から九条大路（東西17目・南北19目）、駒は50種192枚・交点置き、右) 平安京は一条大路から九条大路（東西16マス・南北19マス）；駒は50種192枚・マス置き。

先行研究である平安京復原論文のキーポイントは、平安京は正方形の形状を持ち、かつその内部に正方形の階層構造を形成するという点にある。一番外側に京城全体の正方形があり、その中に平安宮の正方形、さらにその中に大極殿院の正方形、大極殿の正方形と順に焦点が絞られていくことで地の中心を示すことができるというシナリオである。平安京の中を縦横に区切る条坊もまた正方形であり、この正方形が大型将棋のひとつひとつのマスに対応することになる。

さて、本論文の目的は、図1左図（仮説A）の平安京を検証することである。つまり、平安京が正方形であることの検証である。文献資料を用いた仮説Aの検証については、平安京復原論文に譲り、本論文では、文献資料を必要としない手法で検証がなされる。発掘調査により得られた考古学からの知見を参照することになるが、これらの知見からは、もちろん、図1右図（定説C）の条坊が導かれる。定説Cでは、平安京も平安宮も長方形であり、正方形の階層構造も存在しない。定説の平安京は後世の平安京の姿であって、天円地方の思想、道教の思想に則った初期の平安京ではないのである。

したがって、仮説Aの条坊の検証は、定説Cを導いた考古学からの知見に対して、疑問を呈することから始められる。その上で、本検証が拠り所とするのは次の2点である。

- 1) 藤原京、平城京、平安京の3都城は、都城の設計原理として、周礼「考工記」に倣っている。
- 2) 藤原京、平城京、平安京と都城が発展していく中で、都城の設計に使用される数値は、値そのものが引き継がれていく。

上記1)については、通説では、正方形の形状をもつ藤原京のみが周礼「考工記」に基づくとされる。しかし、後の図3にて示すとおり、本論文では、3都城とも最初は正方形の都城として

作られたという前提に立っている。

2) の具体例としては、たとえば、仮説Aの平安京は一辺1500丈の正方形であるが、一方で、藤原京も平城京も一辺1500丈の正方形なのである。これを1500という数値が次の都城の設計時にも継承されたとみなす。日本の都城における、このような「数値の継承」は、京域の大きさだけに適用されるのではなく、羅城の築地塀の寸法(井上2003)や、後の章で議論されるとおり、大極殿や朝堂院の寸法の関係性の中にも見られるのである。

## 2. 初期平安京の条坊

平安京の復原については、10世紀前半に成立した延喜式に平安京の条坊の細かな記載がある。また、平安宮については、たとえば、陽明文庫「宮城図」に絵図面としても見ることができる。これらの文献資料は発掘調査の結果と合わせて検討され、結果的には非常によい一致を示すとされる。ただし、図1右図(定説C)の条坊が、確固たる定説というわけではない。たとえば、瀧浪貞子氏の仮説(以下、瀧浪説)(瀧浪1984)では、造営当初の平安宮は北側が2町分だけ短かったという結論が導かれている<sup>3)</sup>。

図1中図(仮説B)の条坊は瀧浪説からの派生である(桃崎2016)。ただし、その前段階として図1左図(仮説A)の条坊が存在したとするのが本論文の前提であり、平安京の条坊は、図1左図(仮説A)、中図(仮説B)、右図(定説C)の順に発展したものと考える。

ところで、瀧浪説は、将棋史に残されたひとつの大きな疑問に対して、その解決の糸口を提示する。中国象棋の駒が交点置きであるのに、中国から伝来したはずの将棋の駒がなぜ交点置きではないのかという問題がある。これに対して、伝来当初の将棋は交点置きだったという答えを提示できるのである。その詳細については文献(高見2019a;高見ほか2020a)に譲るが、これには、摩訶大将棋の持つ呪術としての絶対性が関連する。盤として使っていた平安京の条坊が変わったときに、それにも関わらず、呪術の摩訶大将棋は変わることがなかったということを示している。

図2と図3に初期平安京および平安宮の詳細を示した。図2が仮説Aの条坊の拡大図であり、この条坊が大型将棋の盤上に写されたものと考え、要点を以下列挙する。

- 1) 京の北端は一条大路(後世の土御門大路)、南端は八条大路である。
- 2) 一条大路の道幅は17丈、八条大路の道幅は28丈である。
- 3) 京の南北長さは両端の一条大路と八条大路を含めて1500丈である。
- 4) 京の東西幅は両端の京極大路(12丈)を含めて1500丈である。
- 5) 平安宮の南北長さは一条大路と二条大路を含めず366丈(朱雀門と昭慶門の距離)、東西幅は、大宮大路と西大宮大路を含めず384丈である。したがって、平安宮の周囲の長さは1500丈であり、京の一辺の長さとも一致する(図3参照)。
- 6) 平安宮の南北長さは一条大路と二条大路を含めれば400丈、東西幅は大宮大路と西大宮大路を含めて408丈であり、この場合の平安宮の周囲の長さは1616丈となる。この長さは9里(1620丈)にほぼ等しい(図3参照)。
- 7) 大極殿は、朱雀門(または昭慶門)から距離183丈の位置、あるいは平安宮の北端(一条大路の北端)から距離200丈の位置に建つ。この位置は平安宮のちょうど中心である。また、中御門大路の中央でもある。
- 8) 大極殿と昭慶門の距離は17丈であり、大極殿の東西幅も17丈である。

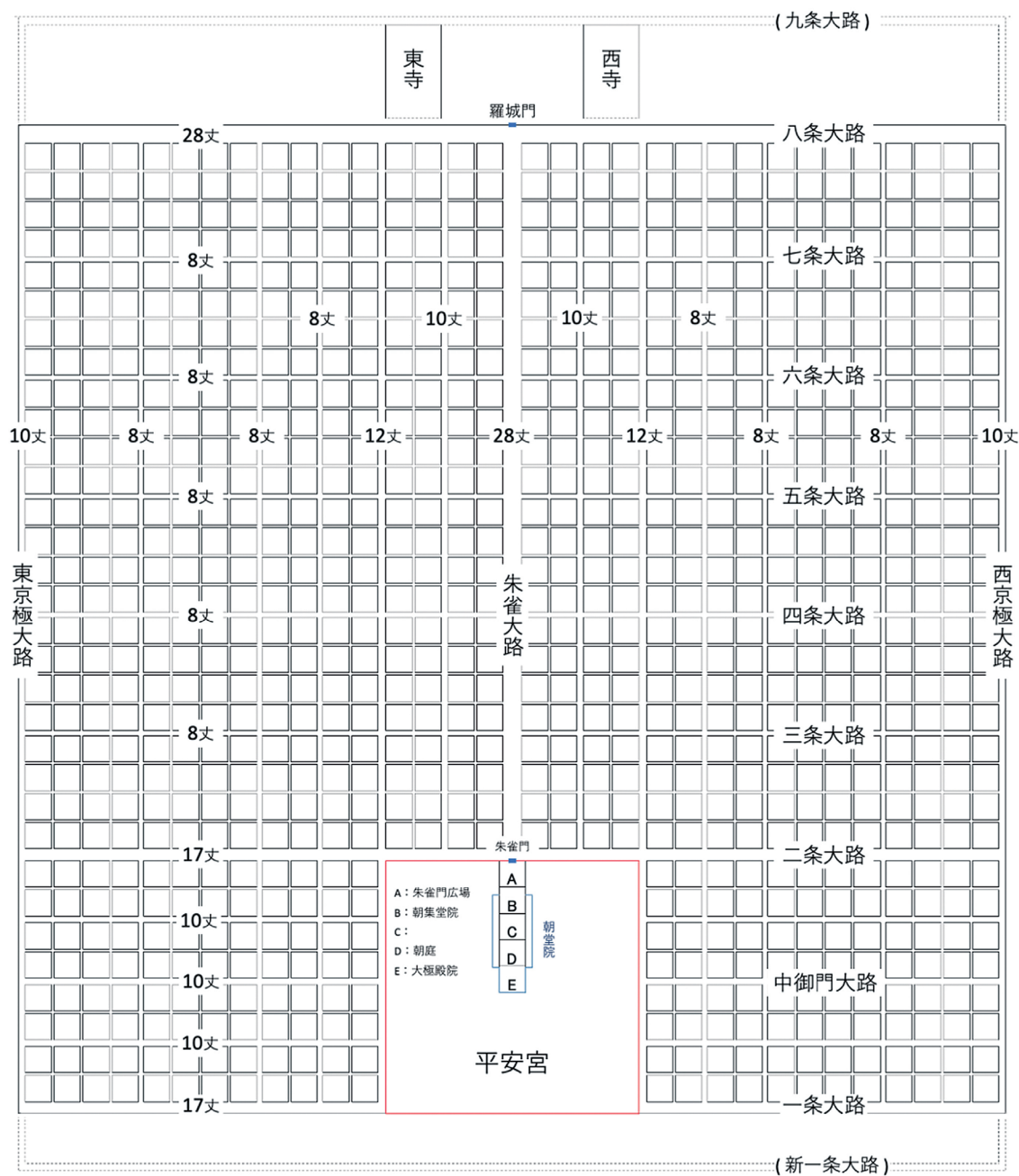


図2. 初期平安京の条坊の仮説（図の上方が南）。8丈以上の道幅のみ数値が記載されている。数値のない道の幅は4丈である。平安京の東西幅は延喜式にある記載値とほぼ同じである。この図に示される初期平安京の南北の長さは後世の平安京よりも6町分短い。北端は後世の土御門大路であり、この道を初期平安京の一条大路とする。南端は八条大路であり、京への入り口の羅城門はこの大路に沿って立っていたであろう。東寺と西寺は京城の外に位置しており、京内に寺院は建造されなかった。一条大路、八条大路の道幅を、それぞれ、17丈、28丈と想定すると、平安京は一辺が1500丈の正方形となる。

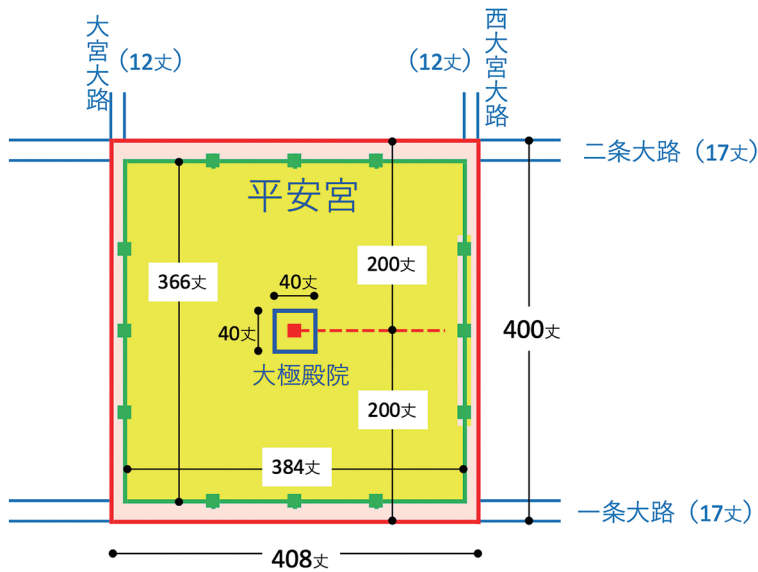


図3. 初期の平安宮.

### 3. 周礼「考工記」に基づく都城

周礼「考工記」匠人宮国の条（以下、周礼とする）には次のような記述があり、日本の都城の構造が議論される際にはよく取り上げられる箇所でもある。

匠人宮國。方九里。旁三門。國中九經九緯。經塗九軌。左祖右社。面朝後市。市朝一夫。

周礼の解釈には諸説あるが、都城設計の問題において、確固たる結論は周礼からは得られていないと言ってよい。その大きな原因は、方九里の解釈にある。多くの論文は、方九里の「九里」をその長さの妥当性から、京城の一辺の長さに対応づけている。方は正方形と見るものの、数値の9については重要視されないのである。9を定量的に取り扱った文献は、管見の限り、見当たらない。

さて、方九里は、京城の一辺の長さではなく、宮城の周囲の長さで解釈すべきである。藤原京、平城京、平安京の3都城では、以下のとおりこの解釈で問題ないであろう。方九里の九が厳密に数値9として設計されているという点に注目されたい。

#### 3.1 初期平安宮の方九里

図3に示されているとおり、初期平安宮の領域を周囲4つの大路（一条大路と二条大路、大宮大路と西大宮大路）を含めて考えると、南北方向の長さは400丈、東西方向の長さは408丈である。

この場合、平安宮の周囲の長さ（ $400 \times 2 + 408 \times 2$ ）は1616丈であり、8.98里（1里=180丈、9里=1620丈、9里からの誤差は0.25%）であることがわかる<sup>4)</sup>。周礼に記載される「方九里」の長さとはほぼ一致する。この値だけからは9里の値として設計されたものかどうかは結論できないが、この点については、次章以降の結果と合わせた末で、個々の研究者の判断に委ねたい。また、1620丈（9里）までの残り4丈（東西で2丈ずつ）が、未知の情報による可能性もあるであろう。たとえば、東西の大宮大路に沿って流れるとされる、考古学上は未確認の大宮川の存在である。

なお、平安宮として周囲4つの大路を含まないとした場合、図3から、周囲の長さは1500丈(366×2+384×2)であり、これは初期平安京のちょうど一辺の長さとも一致する。平安京では、条坊の1区画は一辺40丈の正方形で揃うが、道路幅は場所により異なり、4、8、10、12、17、28丈という限定された値だけで設計されている。こうした事情を考えると、京の一辺と宮の周囲が同じ長さであるというのは、仕組まれた設計の結果と考えるのが妥当であろう。この際、2章の要点2の仮説は重要である。八条大路の28丈は、宮の周囲1500丈、京の東西幅1500丈の2つが確定したあと決まる。そこで、南北長さも1500丈とするためには、28丈という選択肢だけが残る。残された最後の数値を数字合わせのための無意味な数(たとえば、27や29)で埋めたわけではなく、きちんと設計されたものと見ざるを得ない。この28丈は京の南端中央で交差する朱雀大路の道幅でもある。

また、周礼の「傍三門」の記述も初期平安京の十二門(上東門と上西門以外の門)が説明する。「九経九緯」についても境界の大路を含めて数えれば、南北、東西方向とも9本の道が平安京を通ることになり、やはり周礼に則った設計となっている。

### 3.2 初期平城宮の方九里

平城京と藤原京では、方九里の設計は平安京に比べると容易である。条坊を形成する道の間隔が一定値150丈(高麗尺)で設計されているからである。したがって、場所により道幅が異なっていたとしても道同士の間隔は変わらず、変わるのは条坊内の土地区画の大きさの方である。

本稿では、初期平城京の大きさを10条10坊の正方形であると仮定した。近年の十条大路の発掘により(山川2014;山川2019)、従来の定説は変更を迫られていると言ってよい。朱雀大路が九条大路を越えてさらに南進している可能性も大きいのである(清水2015)。十条大路までを京域とすることで、少なくとも南北長さについては1500丈と見積もることができる。

本論文では、さらに、東西幅も1500丈と仮定した。平城京を正方形の形状と見るのは、平城京だけを考察対象とする限り無理な想定かも知れないが、藤原京と平安京ともに一辺1500丈の正方形であるという前提を重要視した場合には、東西幅1500丈の数値も継承されたものと見てよいであろう。なお、本論文では、平安京の南北長さの仮説1500丈が第一に重要であるため、平城京の南北長さが1500丈でありさえすれば、東西幅はさほど重要ではない。

さて、図4に示されるとおり、平城宮は南北2坊、東西2.5坊を占める。定説の復原では、平城宮の東南角に大きさ4坪のへこみが見られるが、周囲の長さだけを考える限り、宮城全体を長方形と見て差し支えない。したがって、平城宮の周囲の長さは9里(1350丈)である<sup>5)</sup>。なお、この値は平城京が正方形の形状かどうかには関係しない。

また、周礼の「傍三門」、「九経九緯」の記述についても初期平安京と同様、周礼に則った設計となっている。なお、「九経九緯」については、平城京の境界の大路を含まないものとして数える。

### 3.3 藤原宮の方九里

藤原京の京域は、諸説あるものの、一辺1500丈の正方形(10条10坊)とする考え方が多数派である。藤原宮としては、図4に示されるとおり、京中央の4坊の領域が割り当てられている。ところで、この場合、宮城の周囲の長さは1200丈であり、9里(1350丈)には遠い。これをどう解釈するかが本論文では大きな論点となる。

宮城の周囲の長さを9里とするために、藤原京では、宮城外と宮城内で用いる尺度が違ったものと仮定しよう。宮城外で使われたのは高麗尺(1尺=35.4cm)であり、宮城内で使われたもうひとつの別の尺度をここでは仮にF尺と呼ぶことにする。F尺を使うことにより、高麗尺

1200丈を1350丈として測るのである。つまり、F尺は、高麗尺よりも目盛りが小さく、1尺=31.5cmと考えればよい。宮城の周囲の長さを9里とするために、設計者は宮城内では尺度をF尺に変更するという手段をとった。単に理念上の数値に拘っているだけで無意味と思われるかも知れないが、次章において見るように、藤原宮ではこの無意味さが貫かれているのである。このことから、都城の設計には、本質的に呪術の要素が含まれるものと考えてよい。都市工学的な考慮はその次なのであろう。このようにして、藤原宮の周囲の長さも9里となった。日本の3つの古代都城は、都城設計における「数値の継承」により、どの都城も一辺9里の正方形に設計されたものと見て、議論を先に進めたい。

なお、周礼の「傍三門」「九経九緯」については、初期平安京、平城京と同じく、藤原京においても周礼に則った設計となっていることが確認できる。

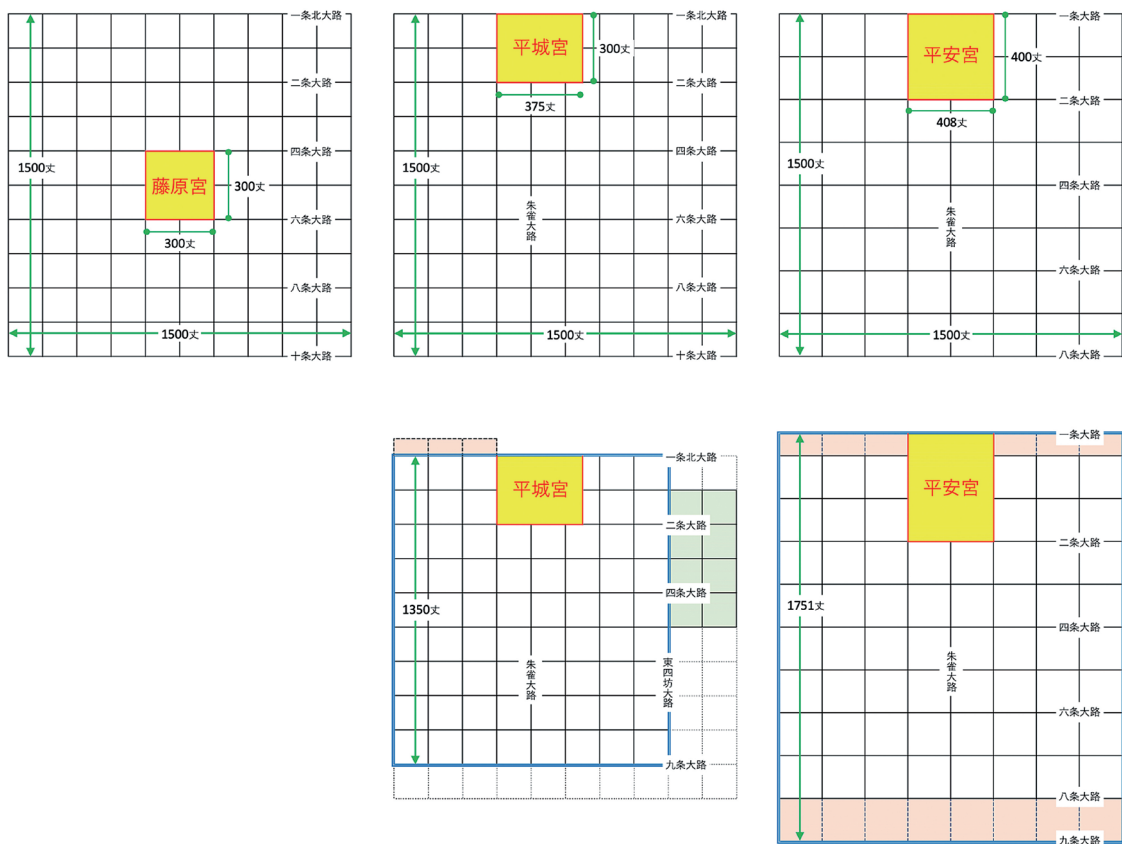


図4. 藤原京／藤原宮（左），平城京／平城宮（中），平安京／平安宮（右）の寸法と形状。上段は造営時における初期設計の形態を仮定している。下段は、初期平城京と初期平安京のその後の形状を示す。平城京は、初期の形態から東側と南側が短縮し、北側の一部が拡張中であると見る。平安京については、南側と北側に京域が拡張したと見る。

#### 4. 藤原宮から平城宮に移築された大極殿

前章で仮定されたF尺の存在は、藤原宮から平城宮に移築された大極殿の寸法から立証することができる。移築された大極殿の東西幅は天平尺149尺で復原されており、基壇を含め180尺とされる（館野2009）。ただし、天平尺で測るのは不合理である。もともとの大極殿が藤原宮で建てら

れた建造物である以上、藤原宮で使われた尺度、つまり、F尺を使用するのが妥当である。尺度が違って実際の長さが変わるわけではないが、都城における最重要の建造物である大極殿については、その位置や大きさに十分な配慮がなされている。つまり、大極殿はきちんとした位置に建てられており、また、その大きさも完数で設計されていると見るべきであろう。こうした観点からは、天平尺149尺という中途半端な値での復原には何らかの問題点があると考えてよい。ここでは、それは発掘調査のデータにはなく、用いた尺度の問題にあると見る。

復原結果である149尺／180尺を、まず高麗尺で換算してみると、124尺／150尺となり、この場合も不適である。次に、F尺で測ると140尺／170尺となり妥当な結果を得る。このように、移築されたのは天平尺で見た大極殿ではなく、実測値は同じであるとは言え、F尺で見た大極殿と考えるべきではないだろうか。

さて、大極殿の寸法について、数値の継承を適用してみよう。平安宮の大極殿の復原は、考古学の知見からは得られていないが、宮城図の図面を直接に読み取ることによって推定すれば、大極殿の東西幅は17丈となる。これは、大極殿－昭慶門の距離に等しく、大極殿と小安殿を囲むこの領域が一辺17丈の正方形を形成するという結果が得られている（高見2020b）。F尺で見た藤原宮大極殿の東西幅170尺がそのまま平安京大極殿に引き継がれたものと見ることができよう。さらに、宮城図からの読み取りを進めれば、東西回廊の中心から大極殿の基壇までが102尺、基壇の出を含む大極殿の東西幅を196尺（柱間16尺×9間、庇13尺×2、基壇の出13尺×2）とみれば、大極殿院の東西幅は40丈に一致する。なお、このときの桁行柱間16尺という数値も、F尺で測られた元々の藤原宮大極殿の柱間に等しい<sup>6)</sup>。ただし、平安京大極殿では、F尺で測る16尺が使用されたのではなく、天平尺での16尺が使用されていることに注意されたい。したがって、平安京大極殿の桁行柱間は藤原宮大極殿のそれよりも狭い。

以上のような状況は、3都城の南北長さが1500丈で揃うものの、使われる尺度が違うため実測値は違っていると同様である。実測値は違うが、設計上はそのままの数値が継承されている。

## 5. 都城設計における数値の継承

### 5.1 大極殿院の比較

3都城の朝堂院について数値の継続性を検討してみよう。以下、この段落での尺度は天平尺である。平安宮復原の定説では、大極殿院の東西幅／南北長さ（北面回廊から龍尾壇まで）は、42.4丈／42.9丈と算出されている（家崎1993）。ところで、図5に示されるとおり、平城京における大極殿院では、中央区で60丈／108丈、東区で40丈／30丈であり、数値が完数になるという点に注目すべきである。

数値の継承という点において、平安京復原論文で導かれた大極殿院の東西幅／南北長さ40丈／40丈の結果は非常に良好である。大極殿院の東西幅についてのみ見れば、藤原宮（天平尺）、平城宮東区（天平尺）も同じ40丈の数値で作られている。平安宮の定説（42.4丈／42.9丈）は再検討の余地が残る。

### 5.2 朝堂院の比較

図5に示されるとおり、平城京中央区朝堂院の東西幅／南北長さは60丈／80丈（高麗尺）であり、平安京朝堂院（龍尾壇から会昌門まで）の東西幅／南北長さも60丈／80丈（天平尺）である。実測値ではなく数値として一致する。



平城京東区で朝堂院の東西幅は60丈（天平尺），同じく大極殿院の東西幅は40丈（天平尺）である。一方，平安京朝堂院の東西幅は60丈（天平尺），大極殿院の東西幅は40丈（天平尺）であり，両方の長さが一致している。朝堂院と朝集院の南北長さについては，平城京東区で115丈（高麗尺），平安京では113丈（天平尺：応天門から朝堂院北面回廊まで）である。なお，平安京で応天門から龍尾壇までの距離は108.1丈（天平尺）であり，この長さは平城京中央区大極殿院の南北長さ108丈（天平尺）にも見られる。また，藤原京朝堂院の南北長さ108丈（天平尺）にも見られるのである。

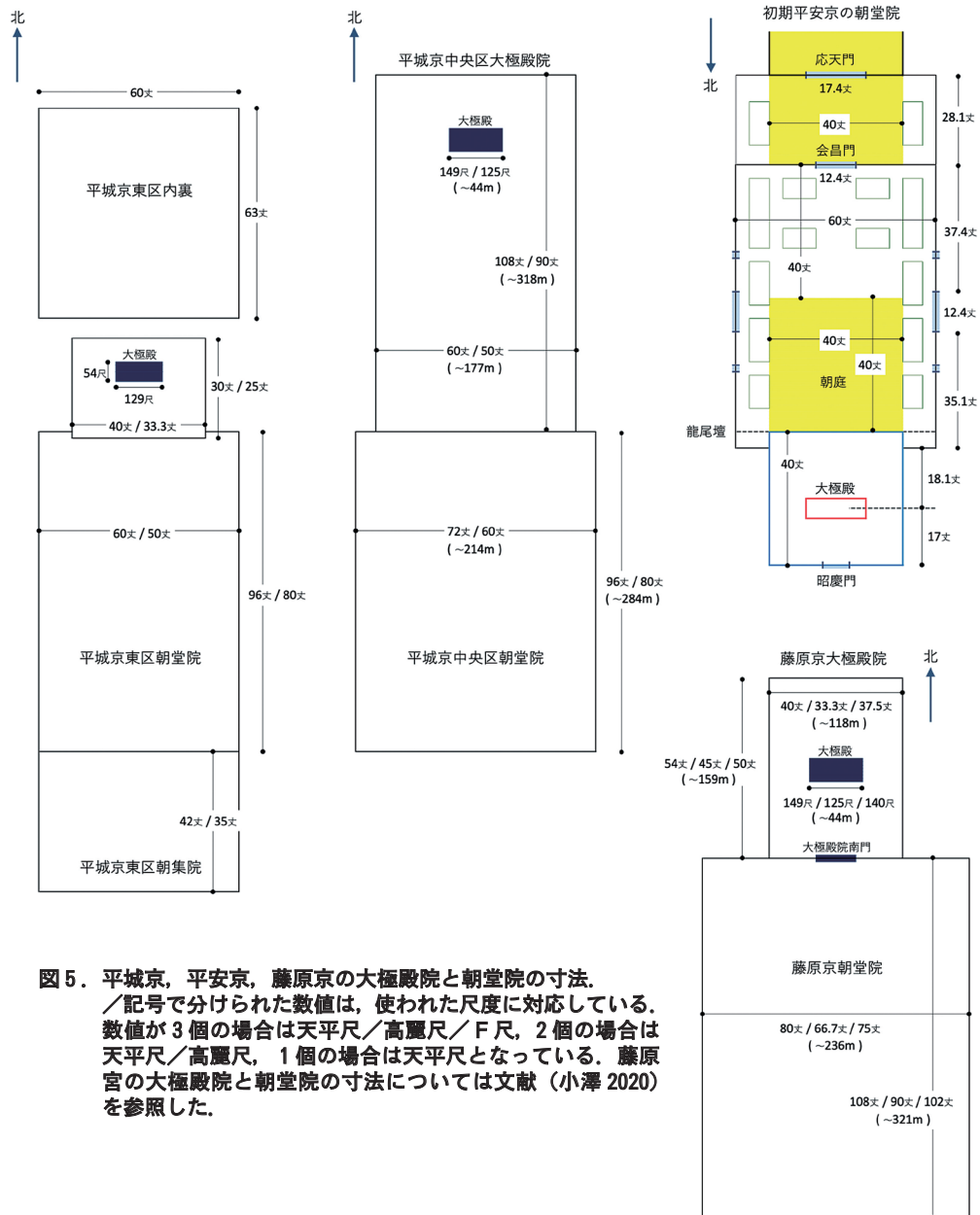


図5. 平城京，平安京，藤原京の大極殿院と朝堂院の寸法。  
 /記号で分けられた数値は，使われた尺度に対応している。  
 数値が3個の場合は天平尺／高麗尺／F尺，2個の場合は  
 天平尺／高麗尺，1個の場合は天平尺となっている。藤原  
 京の大極殿院と朝堂院の寸法については文献（小澤 2020）  
 を参照した。

以上のとおり，平安京復原論文で導かれた平安京朝堂院（龍尾壇から会昌門まで）の東西幅／南北長さ60丈／80丈の値は，前節の大極殿復原値と同様，「数値の継承」という考え方を支持する結果となった。また，同論文で導かれた平安京朝堂院（応天門から朝堂院北面回廊まで）の南

北長さ108.1丈についても、良好な結果である。数値108はきれいな完数ではないが、平城京中央区大極殿院にも藤原京朝堂院にも見られることから、意味をもつ数値と考えるべきであろう。

## 6. 京域の拡大と縮小

京の範囲は基本的には変わらないものとして考察されることが多いが、2章で述べたとおり、瀧浪説のように京や宮の範囲が変わるとする考え方も依然として残っている。平城京の十条大路が、当初は存在し、後になって埋め戻されたという調査結果（山川2014）が報告されているが、これは京域が変化していることを示唆する。本論文および平安京復原論文では、当初の京域が正方形であったという仮説を提起しているが、遺跡として残る平安京、古文書に伝わる平安京が正方形でない以上、ある時期に京の範囲が変わったと考えざるを得ない。

図4の下段に、当初の正方形の平安京、平城京からの変遷の一案を示した。初期平安京の正方形は、まず南側に4町拡張され、京域の南端が九条大路となった。次いで北側に2町拡張されて北端が新たな一条大路となったものとする。北側へ拡張したとする説は、1984年に瀧浪貞子氏により提起されたのがはじめであるが、この説の可否は現在も結論が出ていない（末松2020）。

一方、初期平城京の正方形は、南側の4町、東側の8町が京域から除かれたものと考えて、京域の南端が九条大路、東端が東四坊大路であるとする。ただし、東側は縮小化の途中段階にあると見る。北側については、平安京と同様、2町だけ北に拡張されるが、その拡張は右京の3坊分だけに留まっており、東側と同様で、変遷の途中段階にあると考える。平安京、平城京とも一案に過ぎず今後の解明を待ちたい。

## 7. おわりに

本論文では、先行研究としての平安京復原論文（高見友幸、2020b）の検証を試みた。天円地方の思想が、都城の設計に組み込まれたとした場合、地の都城として作られる「地方」は厳密に正方形でなければならない。これが目指す結論となる。

初期平安京に見られる正方形の階層構造は、いわゆる「造形原理」に基づいた美的設計ではないことに注意されたい。また、平安京のみならず3都城に共通する正方形への執着は、都市工学に優先するという意味で「呪術的」という表現を用いたが、信仰的要素よりはむしろ理念である。つまり、都城の正方形構造は、天円地方の思想や周礼「考工記」と強い関係性を持っている。以上のことは次の3点からの帰結である。

1) 都城の正方形は京全体にわたって建設されているわけではない。たとえば、藤原京の南東部、平安京の南東部は山地や湿地帯であり、条坊自体がないのである。したがって、正方形は設計上だけであり、造形原理とは関係しない。

2) 3都城とも周礼「考工記」に記載の都城モデルである「方九里」「傍三門」「九經九緯」を満たす。「方九里」については、宮城の周囲長が九里であるという新解釈を取れば、藤原宮と平城宮は厳密に方九里が実現している。平安宮も1%程度の誤差で方九里である。特に、藤原宮については、F尺という尺度を導入してまでも方九里を実現しているという点に、周礼への強い固執を感じる。

3) 本研究が平安京の正方形を呪術的な産物とするのは、先行研究（高見ほか2020a；高見

2020b) の内容をそのまま受け継いでいることによる。大型将棋の駒は陰陽五行思想に基づいて構成されており、まさに呪術的要素を体現したものである。駒が呪術のツールであるとするならば、駒が載る将棋盤はどうか。大型将棋の将棋盤は平安京の条坊に一致しており、このことから平安京の条坊の呪術性が研究対象となった次第である。

さて、本論文での検証は文献に基づく検証ではない。都城設計における「数値の継承」だけに基づくものであるため、最終的には文献学、考古学からの検証が必要であるが、究明すべき方向性を明確に示したという点は大きいと考える。藤原京、平城京、平安京の3都城の設計モデルとして周礼を選ぶことで、藤原宮に固有であるF尺の存在を提起した。4章と5章で検討された「数値の継承」を信じるならば、F尺は存在したのである。数値の継承は、都城の大きさだけでなく、大極殿の大きさ、大極殿院の大きさ、朝堂院の大きさにも適用されているものと思われる。また、平安京復原論文では、百済王寺における金堂の回廊の南北長さを17丈と復原しているが、この17もまた平安京大極殿の方形17丈の数値と同じ起源なのかも知れない。

なお、大型将棋の盤に関する学術的な検討は、我々の研究以前にはなされておらず、今後の研究発展が期待される。文献からの検証としては、摩訶大将棋の圖によるものを挙げるができる。摩訶大将棋の圖には、盤の大きさとして横19目向こう17目と記載されている(高見2019b)。この将棋盤のマス数は、図1中図(仮説B)の条坊に対応している。盤の縦横のマスが同数でないことに注目されたい。縦横同数ではない将棋盤の記載は、この文献が唯一である。

また、大型将棋の盤の出土は新安沖の海底遺物として1件のみが存在する(増川1987)。この盤のマスの形状はほぼ正方形であり、平安京の正方形の条坊との対応を示唆するものであろう。将棋盤のマスは、通常、長方形なのである。

## 謝辞

本学デジタルゲーム学科高見研究室諸氏には、摩訶大将棋の遊戯ルールに関する検討を重ねていただきました。本研究で使用した平安京の呪術性を表現したCG動画は、先端マルチメディア合同研究所(JIAMS)のCGスタジオを利用して制作しました。また、論文査読者には貴重なコメントをいただきました。深く感謝いたします。

本研究の一部は、2020年度科研費:挑戦的研究(萌芽)「古代日本の大型将棋に関する研究」(研究代表者:高見友幸)による助成を受けて行われています。

## 注記

- 1) ここでは、摩訶大将棋の例についてのみ示したが、盤と平安京の条坊との一致は、大大将棋や平安将棋等にも見られる。詳細については、文献(高見2019a;高見2020b)を参照されたい。
- 2) 東西2町・南北2町の正方形の領域が1保である。東西、南北とも中央に幅4丈の道が通るため、1保の領域は1辺84丈(約250m)の正方形と考えればよい。1保が大型将棋の盤の1マスとなる。
- 3) 厳密には、瀧浪説は、平安京が南北に狭かったとするものではなく、平安宮のみが狭かったとする説である。つまり、現状の定説とは違い、平安宮が平安京の北端にはなかったとする。ただし、瀧浪説から派生し平安京自体が狭かったとする説も見られる。
- 4) 平安京の1里は180丈(天平尺。1歩=6尺, 1里=300歩=1800尺=180丈)である。
- 5) 平城京の1里は150丈(高麗尺。1歩=5尺, 1里=300歩=1500尺=150丈)である。
- 6) 平安京大極殿の桁行柱間については、文献(家崎1993)では不明としつつ、「大内裏図考証」に記載の柱間16尺が参考値として使われている。なお、「大内裏図考証」では、この大極殿の基壇の東西幅を198尺としている。

## 引用文献

- 家崎孝治, 平安宮大極殿の復原『杉山信三先生米寿記念論集』, 論集刊行会, 1993.
- 井上和人, 平城京条坊道路の設計規格について, 奈良文化財研究所紀要, 2003.
- 小澤毅, 「藤原宮」(王宮と王都: 講座 畿内の古代学), 雄山閣, 100-131, 2020.
- 清水康二, 下ツ道・平城京南方遺跡「奈良県遺跡調査概報2013年度(第二分冊)」, 奈良県立橿原考古学研究所, 2015.
- 末松剛, 初期平安京について: 「第一次平安京」説の再検討, 社会科学(同志社大学人文科学研究所), 50(1), 1-21, 2020.
- 妹尾達彦, 長安の都市計画, 講談社選書メチエ, 2001.
- 高見友幸, 摩訶大將棋の復刻—古代日本の大型将棋に関する考察—, 大阪商業大学アミューズメント産業研究所, 研究叢書第19巻, 2019a.
- 高見友幸, 最近発見された摩訶大將棋に関する古文書, IR\*ゲーミング学会ニュースレター, No.38, 8-11, 2019b.
- 高見友幸, 中根康之, 木子香, 原久子, 呪術としての大型将棋に関する考察, 大阪電気通信大学人間科学研究, Vol.22, 13-24, 2020a.
- 高見友幸, 初期平安京の復原—都城の思想と大型将棋の将棋盤—, 国際ICT利用研究学会論文誌, Vol.4, 18-28, 2020b.
- 瀧浪貞子, 初期平安京の構造-第一次平安京と第二次平安京-, 京都市歴史資料館紀要, 1984.
- 館野和己, 平城宮の大極殿, 21世紀COEプログラム「都城制研究2」, 47-58, 2009.
- 増川宏一, 碁, 法政大学出版局, 1987.
- 桃崎有一郎, 平安京はいらなかった, 吉川弘文館, 2016.
- 山川均, XT 調査区(平城京十条発掘調査報告書—平城京左京一・二坊及び羅城の調査—), 大和郡山市教育委員会・(公財)元興寺文化財研究所, 2014.
- 山川均, 平城京歴史講座, 2019.6.8.

## 原摩訶大将棋に関する補足

図6に仮説Aの条坊に摩訶大将棋の駒を並べた初期状態を示す。駒は交点置きで、初期平安京と同様、盤は正方形で縦横17目となる。古文書で伝わる摩訶大将棋は横19マスであるため、図6の初期配置は仮定である。象戯圖に記載される摩訶大将棋の駒50種からは横飛と瓦将の2種が取り除かれ、駒数は180枚となる。これにより、六十干支の表をすべての駒種（48種）を使って構成することができ、陰陽五行思想が際立つ結果となる。定説Cの条坊を将棋盤とする摩訶大将棋では、遊戯上大きな欠陥が見られるが、これを原初の摩訶大将棋に加えられた後世の変更によるものと見たい。遊戯に関する問題については、別論文にて議論する予定である。

なお、玉将の左右のマスには左将と右将の駒が置かれることに注意されたい。古文書で伝わる初期配置では、この位置に提婆と無明が配置される。しかし、盤となる平安京は道教の思想に則った都であり、平安京内に寺院の建立は禁止されていた。したがって、仏教関連の駒が並ぶことはないであろう。定説Cの条坊では、東寺と西寺の2寺だけが京内に建つが、仮説Aの条坊では、東寺と西寺は京外に建つ。

仮説Aの盤では、敵味方の歩兵は間隔5目で相対する。世界の大型将棋は、日本の大型将棋も含めて、歩兵相当の駒はどの将棋類でもすべて4マスの間隔を開ける。このことは、この原摩訶大将棋が大型将棋類のルーツである可能性があると考えられる。将棋の基本ルールでは、駒の成りは敵陣への進入、つまり、歩兵の並ぶ列への進入をもって成りが実現するが、左京から右京への進入（右京から左京への進入）で成りが実現すると考えてよいかも知れない。通常の摩訶大将棋の盤（定説Cの条坊を使う盤：歩兵の間隔は4マス）でさえ、成りはほぼ実現しないからである。

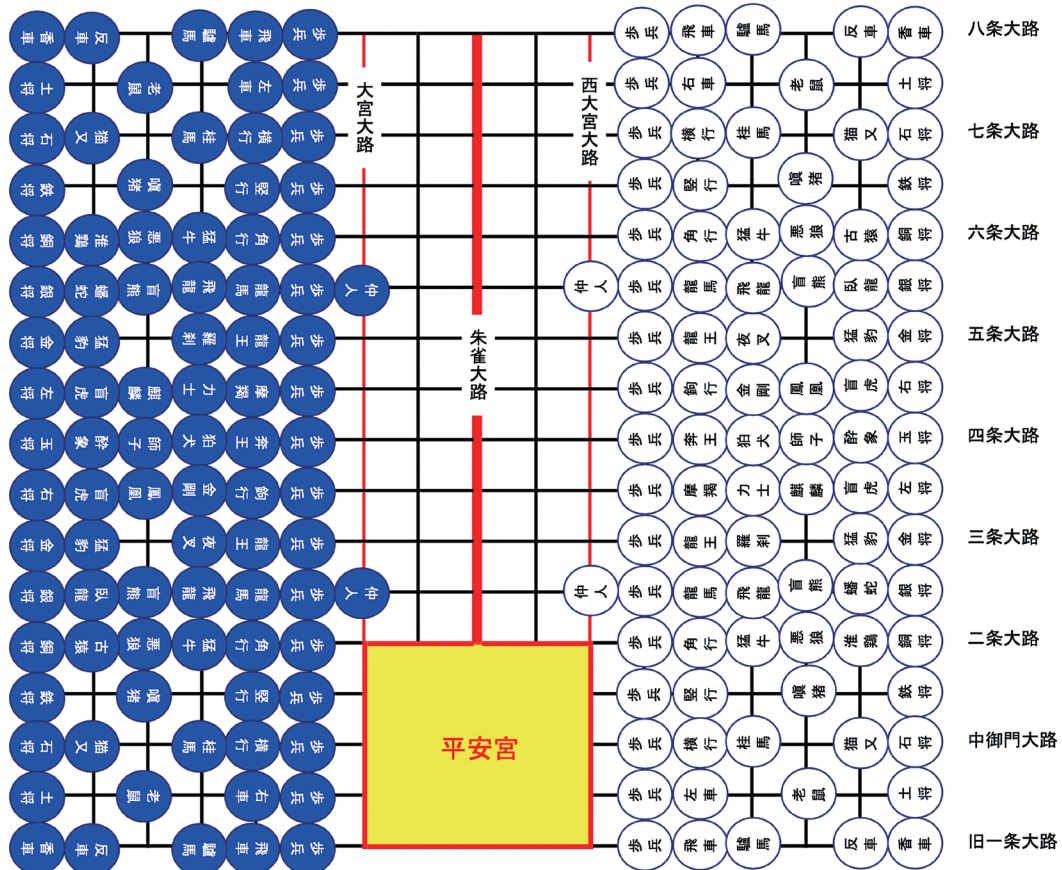


図6. 初期平安京の条坊を将棋盤として使用した摩訶大将棋の初期配置（仮説）。